●インタビュー

国際交流の意味・方向をしっかりと見きわめて

須田麗子さん（県国際交流協会ボランティア相談員・通訳・ブルネイ出身）

通訳、県国際交流協会ボランティア相談員として大活躍の須田さん。〝地球人〟須田さんの目からみた国際化・国際交流についてお話を伺いました。

国際化とは何かを正しく理解していなければ間違った方向・意味での国際化になってしまう

―「国際交流」が盛んに言われていますが、須田さんは日本の国際交流・国際化をどのように見ていますか。

須田　私から見て日本人は、すごく無理していると思います。そして、国際交流を勘違いしている。世間がやっているから自分もやろうというふうだと、変な方向に行ってしまいます。最近は、そういうことが目立って増えていますね。例えば短期間のホームステイがいい例です。受け入れ側は「家に外国人が来ているのよ」と得意げに自慢する。そして短い時間の中で一生懸命におもてなしをする。私には何でそこまでする必要があるのか不思議でなりません。私もホームステイを引き受けた人のお宅に行ったことがありますが、当の外国人は私に「疲れた」と訴えるのです。もちろんそんなことは直接ホストファミリー（受け入れ家庭）に伝えられません。何回も「お風呂に入りなさいよ」とか親切心で言ってくれる。でも外国人にとってはそれがとてもうんざりすることなんです。日本人にしてみれば精いっぱいのおもてなしなんですけどね。だからホームステイを受け入れるときには、ある程度、相手の生活習慣などの知識を持っておいた方がお互いに楽だと思いますね。

国際化とは何かを正しく理解していなければ、間違った方向、意味での国際化になってしまうと思います。

みんな同じ人間…同じように接するのがまず基本だと思います

―では、交流する上では何が大切でしょうか。

須田　所詮（せん）みんな同じ人間でしょう。たまたま人種は違っても同じ日本に、白根に（住んで）いるわけです。だから外国人とも同じように接するのがまず交流の基本だと思います。今、日本にいる外国人の中で一番生活に余裕のある人たちは研修生、留学生、ＡＬＴ（語学指導助手）などです。反対に困っている人たちはアジアから来た花嫁さん、労働者、中国残留孤児の人たちです。例えば、さっき言ったホームステイでも、世間では国際交流が盛んだから自分たちもやろうという人たちが招待するのは、余裕のある人たちの方です。そうすると交流も偏ったものになります。余裕のない人たち、困っている人の声は、一部にしか届きません。結局、国際交流という看板を出すと、偏った交流しかできなくなるんです。だから今、世間でやっている交流なんて崩しちゃってもいいと思いますね。

―それは、ホームステイだけでなくイベントに関しても言えることですか。

須田　そうです。国際交流のイベントの場合、まず外国人を探して招待しますね。呼ぶ側は、いろんな手段を講じて来てもらう。会費は要らないとか、お土産付きとか。それを見るたびにむなしくて仕方ないですよ。その時間だけ外国人が必要で、ワイワイ騒いで「はい、それでおしまい」なんて得るものは何もないでしょう。外国人が来たと見えを張るだけ。困っている人たちがいっぱいいるのに、その人たちの方には目を向けない。ホームステイにしろ、パーティにしろ無理してる。それじゃあ何も残らないじゃないですかと言いたいです。

今やっている国際化・交流はどういう方向に進んでいるかを考え直すべき

―外国から来た人たちを受け入れる日本人側の問題はありますか。

須田　個人レベルでは、閉鎖的で受け入れに問題があるのはわずかだと思います。しかし制度自体が問題だというのはあります。ＡＬＴの制度です。アジアから来た花嫁さんでも立派に英語を使っている人たちはいっぱいいるのになぜ活用しないのか。ＡＬＴの選考には金髪、白人、黒人、アジア人と区別されている。実際、彼らから聴いた話ですが、金髪・白人から先に選考されるそうです。それに彼らの授業の持ち時間は週に一度程度ですよ。それで本当に英語が覚えられると思いますか。

真の国際化・国際交流を目指すなら、今やっている国際交流はどういう方向に進んでいるかを考え直すべき。ＡＬＴを呼ぶことも華やかな国際交流に見えるかもしれないけど違いますね。日本人が人間を肌の色で区分けするのは、根深い問題ですぐになくなることじゃない。でも考えてみたらおかしなことですよね。白人で金髪だと完璧な英語ができると思いがち。それは日本人が英語ができないということに対してのコンプレックスですよね。

日本にいる外国人を使って子供たちに英語を教える。その代わりに日本人は日本の法律を外国人に教えてあげるとか。そんなふうにしたら、白根近辺で立派に多民族社会の環境ができると思います。それには、まず日本人が受け皿の基礎作りから始めなければいけないでしょう。

プロフィール
須田麗子・ブルネイ出身
県国際交流協会ボランティア相談員として、真の国際交流とは何かを各地で講演。大きな反響を呼び起こしている。英語、中国語、マレー語の通訳としても活躍中。関東管区警察局国際犯罪登録通訳人。白根国際交流協会会員。味方村在住。

これからはお互いに同じ人間として助け合い話し合わなければいけない時期にきている

―これからの国際交流はどのように進めていったら良いと思いますか。

須田　まず基本的なこととして、行政側は受け入れ体制をつくってほしい。生活に必要な部分に関しての法律を職員にきちんと勉強させて対応できるように教育すべきだと思います。外国人が何か聞きたいとき、役所へ行くと対応できずにたらい回しにされるケースがよくあるんです。日本の法律は日本語でできているんですから、外国語が話せる話せないの問題じゃないですよね。最低レベルのことはやってほしい。行政の人も呼んで外国人に困ったことをみんな言わせて行政にも聴いてもらう。いろいろな話をする場があったらいいと思います。

誇るべき伝統・文化を次代に伝え、さらにその上で国際交流を進めるべき

須田　これまで、日本は伝統・文化といったものをみんな捨てて、国際交流中心にやってきました。この二十年間、国際交流だと言って外国人に合わせ、自国の文化・伝統などをどれだけ削ってきたか当の日本人は知らないですね。だから、外国へ行っても自国の文化を紹介できなかったり、若い人が正しい日本語を話せなくなったりしている。世界に向けて自国の文化を発信する時期なのに…。国際交流を推進して振り返ってみたら何もなかったということになっていますよね。日本の伝統・文化は危機に瀕していると思います。自分たちの誇るべき伝統文化を次代に伝え、さらにその上で国際交流を進めるべきだと思います。

そしてこれからは外国人側もただのパーティー要員としてでなく一歩進んで、お互いに同じ人間として助け合い、話し合わなければいけない時期にきていると思います。それで相手の生活習慣や言葉も覚えられるようになっていくはず。お互いに話し合うことが大事ですね。自分の国のスライドを子供たちに見せてあげたりすることだけでも十分国際交流ですよね。同じレベルで話ができるようになれば、それが一つのステップですよ。地域にいる日本人と外国人がお互いをちゃんと見て、同じレベルをつくる時期にきていると思います。